

日本大学工学部

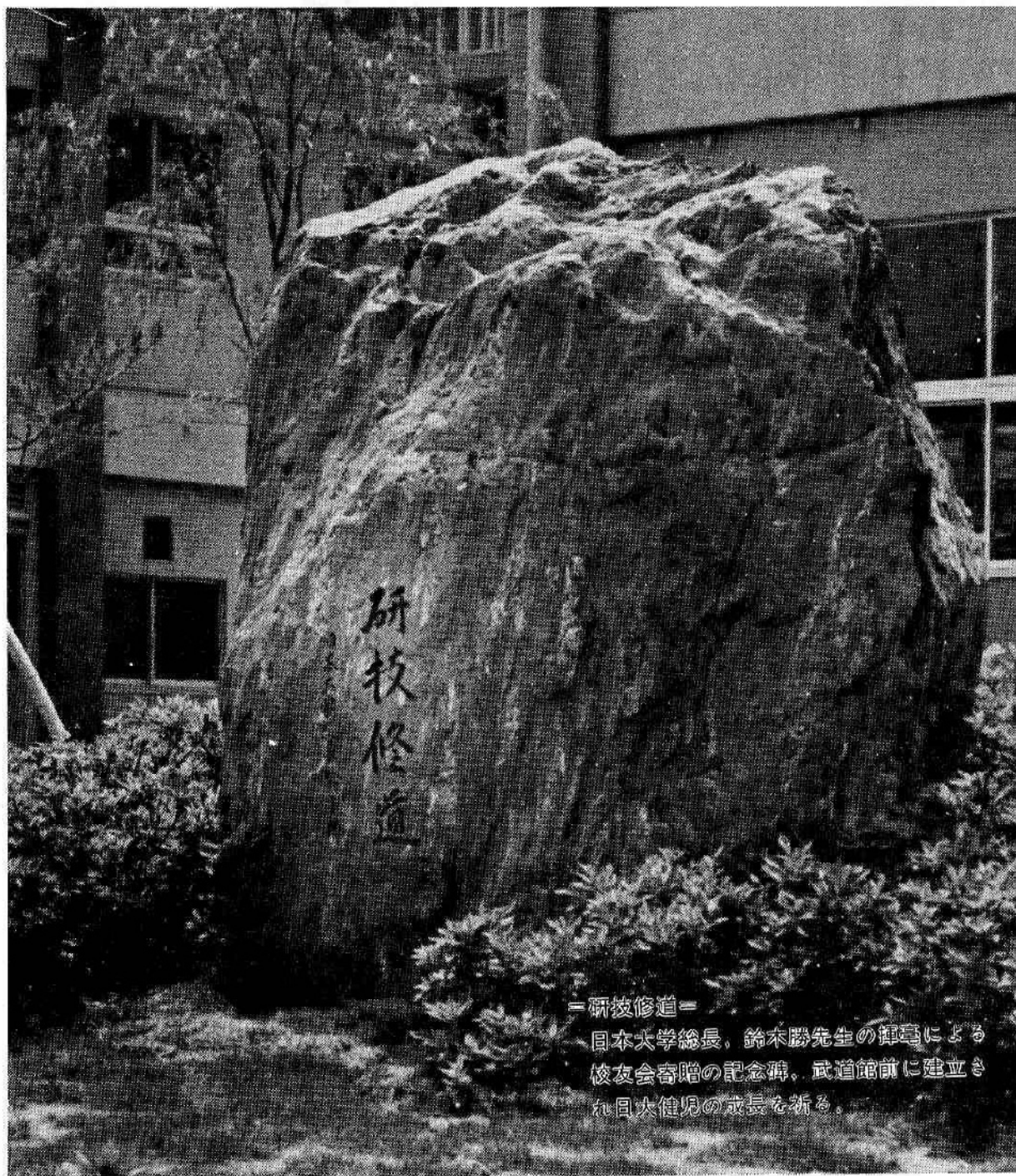
校友会報

第25号

昭和49年7月10日

目次

工学部近況・ごあいさつ	1
ごあいさつ	2
工学部校友会総会	3～5
日本大学校友会福島県支部総会	6
ヨーロッパ研修記	7～8
図書費の寄贈・校友の雑感	9
P.Cローゼ橋の施工について	10
新卒者と新入生の声	11
母校並びに事務局だより	12



＝研技修道＝

日本大学総長、鈴木勝先生の揮毫による
校友会寄贈の記念碑。武道館前に建立さ
れ、目大健児の成長を祈る。

工学部の近況について

日本大学工学部長 外木 有光



工学部校友会は毎年新しい卒業生を迎えて会員数が漸増し、量的に組織が拡大されています。しかも今年第22回の卒業生を送り出したことを考えれば、社会のあらゆる分野の第一線で指導的な活躍をしている大先輩諸兄を先頭に中堅層、新人の諸君が続き、質的にも健全な発展を遂げていることは何にもまして喜ばしいことです。さらに校友会は学生諸君の勉学に資するため図書を寄贈され、クラブ活動の一助にと助成金を補助されるなど優れた後輩を育成されようとして

いる諸兄の御厚志には深甚なる謝意を表します。

さて工学部も年々規模を拡大し、その形容を整えてまいりました。おそらく数年学校を見なかったらその大きな変化に驚くことでしょう。昨年度の工事のうちいわゆる「森の家」の増築はすでに竣工し、図書館の拡張・改造、東磐梯寮の増改築等の工事は現在続行中であり、今年度は中講堂の新築が間もなく入札の段取りになっていますし、新しい実験棟の構想も練りつつあります。校地の拡張も隣接の約33,000㎡の耕地の買収を終り、施設の増強とともに教育の場にふさわしい環境を整備してきました。

内面的には来年3月博士課程の第1回生がでることになり、学問の府として大きな飛躍が期待され、これは学部の一層の充実にもなります。

このように工学部が着実に基礎を固め、内容・外観ともに長足の進歩をしてきたのは、教職員と先輩諸兄が一致協力して建学の苦しみに耐え、これを克服してきた努力の賜であります。最近理工系3学部長の会合や各科毎の会合等がおこなわれ、種々の問題点が討議されてきています。それぞれの特徴を確立し、しかもお互に理解し助けあって、理工系3学部の充実・発展のためにこれ等の会合は推進力となり、次第に効果をあげていくものと確信しています。このような状況に合せて教育の内容をさらに高め、これまでより以上の発展を期するためには、工学部はいまこそあらゆる面について再検討をする転機を迎えているのではないかと思います。広い範囲にわたりしかもきわめて難しいことではありますが、衆知を集めて将来のために是非考えておかなければならないでしょう。

最後に校友の集りに招かれて出席した折よく話題となる小林蔵先生、岡部菅司先生のことですが、諸君がお教えを受けた時と全く変りないお元気な姿でいまも講義を続けていらっしゃいます。今日小林先生の米寿のお祝をしましたし、来年は岡部先生が米寿となられます。お伝えして諸兄と共に両先生の御長寿を喜びたいと思います。

(筆者・日本大学工学部機械工学科教授)

ごあいさつ

校友会会長 太田雄八郎



全国の各地各所において、御精励の校友の皆様におかれましては、苛酷なる社会情勢の中を心身共に能うかぎりの努力をなされておるものと、推察いたし心からねぎらい申し上げます。

此の度、私は、昭和47年、48年に次いで、三次にわたり本年

も日本大学工学部校友会会長の重責を荷うことになりました。もとより斯様な責務を完遂出来る器ではありませんが、本会の益々の発展を期して非才の限りをつくし、努力いたす覚悟です。どうか会員諸氏におかれましては、御叱声、御鞭撻、御支援のほど御願い申し上げます。

省りみるに、本会の会員もついに正会員1万2千名準会員5千余名の多きに達し、本会存在の社会的意義は誠に大きく、会員としての発言については、深い責任を感じる次第であります。工学部校友会がこのように成長した裏には、日本大学並びに工学部当局の御支援、恩師の深い慈愛と御指導、更に会員各自の身命をかけた精進努力が実を結び、社会の中で重要な部分を受け持つ者として認められてきたからだと思います。この社会の認容こそ我々の生命であります。誠に貴重なものであります。これは一朝一夕にして醸成されるものではありません。実に本学部創立以来今日までの日時を要したのであります。本会の発足が孤立無援に等しかったころの卒業生各自が、お互の連帯と協力により各所各職の責務を全うし、もって社会の認容を得んものとして結成したことを想いおこせば、本会の今日あるは感慨無量であります。しかし我々は現状に驕るべきでなく、決して又満足しているべきではありません。日本の社会、或は世界の大勢は更に困難な問題を科学に課しています。この解決の担い手は外ならぬ我々であります。更に一段の勉強と努力、精進が要求されているのであります。

会員諸氏におかれましては、どうか今日的な問題の把握と理解を怠ることなく、周到なる準備と前進を御願ひ致します。非力なる私も役員諸氏の協力を得て、本会の初心に帰リ、校友会事業の達成を目標に頑張ります。

(筆者・土木工学科第3回卒業)
郡山市役所土木課課長)

昭和49年度校友会総会開催される

第17回定期総会は、桜の花も満開の4月21日（日）午後1時より、新築移転した校友会館内に於いて、会員多数の出席のもとに開かれました。特に本総会は幸いにも母校に於いて開かれたもので、久しぶりに見る学園はすっかり変わり、その発展ぶりに驚嘆させられた。

会は半沢副会長の開会の辞に始まり、太田会長の挨拶、次いで議長に佐藤幸助（土3回卒）、小栗治男（建7回卒）、書記に小野沢元久（機13回卒）、寺田聖一（機22回卒）の諸氏が選出され、ただちに議事に入った。尚本年度も東京支部、東海支部より責任ある方々の御出席を戴き旧友の顔々が交錯する中で、本会の重要な議案につき活発な質疑があり意義のある総会となりました。

議事の進行については以下の通りである。

第1号議案、昭和48年度会務報告 佐藤事務局長

- 校友会会館事務所移転をしたこと。
- 下宿あっせんの評価と反省について。
- 北海道支部結成準備活動経過について。
- 専門部卒業生の名簿作成を行ったこと。

等の報告があり、承認された。

第2号議案、昭和48年度会計決算報告

○決算報告書（表-1）により松山経理部長より説明があり、次いで監査委員3名を代表し高野操（化3回卒）委員より監査報告がなされ、報告書通り、承認された。

第3号議案、昭和49年度事業計画と予算案の審議

○根本事業部長より詳細説明あり、当面重要な課題として①昨年度準備を進めてきた北海道支部につき7月メドに結成すること。②福島県支部と連絡をとり在県

者の名簿を調査し作成準備すること、③昭和50年度に発行予定の校友会名簿の準備に入る。等があげられた。その他会報の発行、下宿あっせん、図書の手当、卒業祝賀等従来の事業は今年も引続き継続実施する。以上の事業を実施するに伴う経費予算は（表-2）の通りであること等計画の説明があった。特に事務職員の人件費の安いこと、経費全般について、切りつめすぎて活動が良くできないのではないかと等、活発な質疑の後、原案の通り可決承認されました。

第4号議案 昭和49年度役員選出について

選考委員をあげて選出することになり、委員は各科1名と執行部1名の計6名によって選考し、別項の通り新年度役員が決定した。

以上をもって議案の審議は終わったが、その他の項として次の事項があったので付記しておく。

1. 米年度の卒業式は合同卒業式としたいとの学部側の意向であるので、会費の徴収等種々の問題がこれによって発生するので、この件に関する諸問題の解決は役員会に一任することを承認される。
2. 日本大学評議員武田仁幸（土木3回卒）氏より日本大学の新年度予算等についての報告があった。
3. 日本大学工学部・田嶋学生課長より北海道内の支部の準備状況等につき報告がありました。

終わりに武藤副会長の挨拶で閉会となり、引続き別室に於いて、母校教職員の方々、父兄会会長、福島県支部長等来賓多数をお迎えして懇親会に移り、旧師を囲んで遠近の先輩、後輩の談話が続き、しばし我を忘れて歓談した。鈴木総長実筆による「研技修道」刻記念石の前で記念写真をとり、校歌を合唱して解散する。



総 会



懇 談 会

昭和48年度 歳入・歳出決算報告書

(表1) 昭和49年3月31日現在

一般会計

款項	種 目	予算額	件数	決算額	比較増減
----	-----	-----	----	-----	------

△印……減

歳入の部

会費	1 終身会費	3,000	旧1,180 新1,180	3,578,000	3,575,000
	2 入会金	3,000	1,344	4,032,000	4,029,000
繰越金	3 前年度繰越金	4,515,951	1	4,516,951	0
雑入	4 預金利子	40,000	2	48,020	8,020
	5 雑入	1,000	2	1,520	520
繰入金	6 基本財産より繰入	4,400,000	1	300,223	△4,099,777
合 計		8,963,951	2,549	12,476,714	3,512,763

歳出の部

事 務 費	1 給料・手当	1,301,720	28	1,281,973	19,747
	2 保険料	135,000	13	130,281	4,719
	3 交通費	221,000	2	221,000	0
	4 旅費	106,670	12	106,670	0
	5 交際費	248,280	32	248,280	0
	6 消耗品費	52,420	29	52,420	0
	7 備品費	177,230	2	138,900	38,330
	8 印刷製本費	191,180	12	191,180	0
	9 通信運搬費	100,000	20	74,116	25,884
	10 修繕維持費	10,000	2	3,460	6,540
	11 光熱及水道料	12,500	3	12,500	0
	12 雑費	34,000	36	30,275	3,725
計		2,590,000	191	2,491,055	98,945
業 務 費	13 組織対策費	230,000	5	105,149	124,851
	14 会報発行費	1,000,000	13	987,720	12,280
	15 名簿作成費	180,000	2	179,950	50
	16 下宿対策費	20,000	5	20,000	0
	17 図書供与費	300,000	1	300,000	0
	18 卒業祝賀会費	528,400	8	528,400	0
	19 負担・補助・援助費	820,000	6	820,000	0
	20 旅費	21,600	1	21,000	600
	計	3,100,000	41	2,962,219	137,781
	21 総会費	102,863	4	102,863	0
会 議 費	22 役員会費	274,804	46	141,050	133,754
	23 連絡協議会費	422,333	7	422,333	0
	24 旅費	300,000	28	191,960	108,040
計		1,100,000	55	858,206	241,794
予備費	25 予備費	173,951	1	4,000	169,951
	計	173,951	1	4,000	169,951
積立費	26 積立金	2,000,000	1	2,000,000	0
	計	2,000,000	1	2,000,000	0
合 計		8,963,951	289	8,315,480	648,471

A 一般会計

歳入総額	12,476,714円
歳出総額	8,315,480円
差引残額	4,161,234円

B 特別会計

款項	種 目	予算額	件数	決算額	比較増減
校友会館移転費		1,000,000	13	1,000,000	0

C 基本財産

- (1) 前年度からの繰越金 10,870,988円
- (2) 自48年4月 利息 507,985円
至49年3月
- (3) 昭和48年度の積立金 2,000,000円
- (4) 一般会計への繰入金 - 300,223円
- (5) 特別会計への繰入金 - 1,000,000円

計 12,078,750円

D 総 額

(一般会計) (基本財産)
4,161,234 + 12,078,750 = 16,239,984円

上記のとおり報告いたします。

昭和49年3月31日

日本大学工学部校友会

会長 太田 雄八郎 ㊟

監査の結果相違ありません。

昭和49年4月6日

監査 諏佐 達也 ㊟

同 菅野 宗和 ㊟

同 高野 操 ㊟

昭和49年度 予算書

(表2)

款項	種 目	予算額	前年度予算額	比較増減
----	-----	-----	--------	------

△印……減

歳入の部

会費	1 終身会費	3,000	3,000	0
	2 入会金	3,000	3,000	0
繰越金	3 前年度繰越金	4,161,234	4,516,951	△ 355,717
雑入	4 預金利子	40,000	40,000	0
	5 雑入	1,000	1,000	0
繰入金	6 基本財産より繰入	5,786,766	4,400,000	1,386,766
合 計		9,995,000	8,963,951	1,031,049

歳 出 の 部

事 務 費	1 給 料 ・ 手 当	1,650,000	1,350,000	300,000
	2 保 險 料	165,000	135,000	30,000
	3 交 通 費	221,000	221,000	0
	4 旅 費	100,000	100,000	0
	5 交 際 費	200,000	200,000	0
	6 消 耗 品 費	80,000	50,000	30,000
	7 備 品 費	120,000	220,000	△ 100,000
	8 印 刷 製 本 費	250,000	160,000	90,000
	9 通 信 運 搬 費	100,000	100,000	0
	10 修 繕 維 持 費	10,000	10,000	0
	11 光 熱 及 水 道 料	30,000	10,000	20,000
	12 雑 費	44,000	34,000	10,000
	計	2,970,000	2,590,000	380,000
業 費	13 組 織 対 策 費	200,000	250,000	△ 50,000
	14 会 報 発 行 費	1,500,000	1,000,000	500,000
	15 名 簿 作 成 費	360,000	180,000	180,000
	16 下 宿 対 策 費	30,000	20,000	10,000
	17 図 書 供 与 費	300,000	300,000	0
	18 卒 業 祝 賀 費	585,000	350,000	235,000
	19 負 担 ・ 補 助 ・ 援 助 費	920,000	800,000	120,000
	20 旅 費	150,000	200,000	△ 50,000
	計	4,045,000	3,100,000	945,000

会 議 費	21 総 会 費	150,000	200,000	△ 50,000
	22 役 員 会 費	200,000	300,000	△ 100,000
	23 連 絡 協 議 会 費	300,000	300,000	0
	24 旅 費	200,000	300,000	△ 100,000
	計	850,000	1,100,000	△ 250,000
予 備 費	25 予 備 費	130,000	173,951	△ 43,951
	計	130,000	173,951	△ 43,951
積 立 金	26 積 立 金	2,000,000	2,000,000	0
	計	2,000,000	2,000,000	0
合 計		9,995,000	8,963,951	1,031,049

歳 入 総 額 9,995,000円

歳 出 総 額 9,995,000円

差 引 残 額 な し

上記のとおり提案いたします。

昭和49年4月21日

日本大学工学部校友会

会長 太 田 雄八郎

(表3)

昭 和 49 年 度 役 員

役 名	卒 業	氏 名	役 名	卒 業	氏 名
会 長	土木 3 回	太 田 雄八郎	評 議 員	土木 5 回	池 田 澄 幸
副 会 長	土木 3 回	松 山 光 克	同	土木 9 回	飯 紫 朗
副 会 長	化学 6 回	半 沢 忠 忠	同	土木 13回	西 村 孝 男
事 務 局 長	機械 9 回	佐 藤 光 正	同	建築 7 回	小 栗 治 男
理事・事業部長	機械 4 回	根 本 年 雄	同	建築 10回	橋 本 寛 仁
理事・経理部長	土木 8 回	武 藤 貞 泰	同	建築 17回	湯 佐 健 仁
理 事	電気 3 回	釣 卷 旦 男	同	建築 18回	山 崎 喜 造
同	機械 4 回	水 田 守 恒	同	機械 16回	佐 川 昌 輝
同	土木 5 回	吉 田 明 恒	同	機械 17回	鈴 木 清 司
同	建築 6 回	佐 藤 満 夫	同	機械 19回	安 藤 進 輔
同	電気 9 回	高久田 稔	同	電気 2 回	関 根 昭 一
同	機械 13回	小野沢 元 久	同	電気 14回	伊 藤 宜 世
同	建築 14回	宗 像 武 久	同	電気 16回	鈴 木 守 夫
同	化学 14回	小 川 敏 彦	同	化学 2 回	篠 崎 道 夫
日本大学評議員	土木 3 回	武 田 仁 幸	同	化学 13回	五十嵐 昭 教
監 査	機械 2 回	菅 野 宗 和	同	化学 15回	小 林 義 美
同	化学 3 回	高 野 操	同	化学 19回	新 田 起 志雄
同	化学 3 回	花 井 馨	東 京 支 部 長	土木 3 回	古 村 和 夫
評 議 員	土木 4 回	鈴 木 諄	東 海 支 部 長	土木 3 回	平 野 卓

日本大学校友会福島県支部総会及び 日本大学総長鈴木勝先生叙勲祝賀会開催される

風薫る五月晴れの5月6日、13時より市内平安閣において、県支部会員 250名が出席して盛大に総会が開催された。石田工学部事務長の司会により、高橋県支部長の挨拶、柴田校友会本部長の来賓挨拶があり、続いて議長団に川越県副支部長、太田工学部校友会長、岡部県支部理事が選出され議事に入った。

議 事

- 第1号議案 昭和48年度一般経過報告
- 第2号議案 本部会費納入について
- 第3号議案 県支部会員名簿作成について

等の議案が提案され、各学部校友の活発な質疑応答があり、各議案が満場一致で可決され総会を閉会した。続いて、鈴木勝総長をお迎えして、盛大に勲一等叙勲祝賀会を開催した。田嶋学生課長の司会により、外木学部長の挨拶、鈴木勝総長の経歴紹介、総長の挨拶があり、総長の数々の功績と叙勲を祝賀し、総長の益々の御発展と御健康を祝福して、16時工学部プラスバンドの演奏により校歌を合唱し、日本大学の繁栄と福島県支部の発展を祝して盛大裡に閉会した。

ご あ い さ つ

日本大学校友会福島県支部長 高 橋 堯

激しく変る世情を反映するかのような気候の移りかわりの中にも、若々しい草花が一段と美しく、生々と感じられる頃となりました。

校友各位におかれましては、益々御発展との由、衷心より御慶び申し上げます。

私は、過日、日本大学校友会、福島県支部総会におきまして、会員の方々より、身に余る推挙を受け、多多適任の先輩諸氏が、おいでになるのにもかわらず、福島県支部長の大任を再び務めることになりました。皆様の御援助をいただいてこそ、任を果せるものと思えますので、何卒よろしく御願い申し上げる次第であります。

さて、御承知の如く、日本大学が、日本の教育界に偉大なる貢献をしていることは、誠に欣快至極に存するものであります。

しかし、ここまでの道程が、決して容易でなかったことは、我々はじめ、衆知の事実であります。

幾多の困難をのり越え、本日の母校をあらしめた、大学当局、並びに関係各位には、深く謝意を表するものであります。

更に又、常に母校の卓越した教育活動を支持し、援助を惜まなかった三十八万有余の校友の力が、どんなに有効であったかは、申し上げるまでもないことでありましょう。

校友会の組織も着実に充実し、現在では、各県単位の支部は申すに及ばず、実に六十六ヶ所に支部を有する大きな団体となりました。

本県には、すべての学部の卒業生、合せて約二千名近く在住し、官界、教育界、医界、産業界等の各界に於て、めざましい活躍をしています。

我が福島県支部も歴史は古いのでありますが、新しい世代の流れにおくれることなく、常に体質の刷新をはかり、特に、本県には、工学部が設置されておりまして、当支部としては、一段と重い役割が、課せられているものと自負しています。

どうか、会員の皆様には、本会の目的達成のためによろしく御理解、御支援を御願ひ致します。

(筆者・福島県郡山市助役、昭和13年日本大学高等工学科卒業)



支 部 総 会



祝 賀 会

ヨーロッパで出遭った青銅群像

日大工学部一般科 中村 伊作



昨年の夏、幸いにも工学部欧州研修旅行に便乗を許された。各地において深く心に刻まれ、忘れ難い感銘を受けた二三の群像について記し、考えていることを訴えたいと思うのである。

我々のバスがミラノを出発し風光明媚を以て聞こえるコモ湖畔を過ぎてスイスに入ったのは8月1日の朝であった。国境を越えるとやがて道はサンゴタール峠の峻嶒にさしかかる。バスは峠の麓にあるアイロロ町から直ぐ屈曲の激しい急カーブの連続する山道を一気に駆け登って海拔2400mの頂上に達するのである。切り立つばかりの絶壁の中腹に造られた道は右に左にと折れ曲り、そのたびに眼前の風光は走馬灯のめぐる様に転回した。忽ち視界は展げ、眼下に見おろすアイロロの町を初め、起伏重畳する峰々、見はるかす裾野のこなたあなたの村落が絵のように展望される頃から、深いトレモラの谷を隔てて次第にその全貌を窺わして迫りくるイタリアアルプス連峰の偉容、悠久千古の神秘を湛える雄大な氷河。その規模の雄渾壯大見る人の心を圧倒せんばかりであった。

我々は先のアイロロの町で昼食を摂った。出発までの暫くの間、思い思いに通りを散歩していた時アイロロ駅の前で思いがけぬ物を見た。それはサンゴタール隧道工事の犠牲者に献げられた青銅群像の記念碑(写真)であって、工事のさ中に起った惨事の劇的一瞬を迫真の力を以て表わしていた。事故犠牲者を数名の仲間が担架で運んでいる所である。担架を担いでいる者、傍に添うてカンテラを掲げている者。彼らの悲嘆と心痛が惻惻として伝ってくる。殊に先頭を歩いている男の沈痛そのものの表情は見る人の心に忘れ得ざる深い感銘を与えずにはおかぬ。年輩と風格から察して彼は工事の責任者か村の長老であるかも知れない。彼は足もとに眼を落とし深い憂に沈みながら黙々として歩いて



いる。死者への悼み、双肩にかかる責任の重さ、この先の予測を許さぬ事故に対する憂慮、彼の胸中に去来する万感の想いをこの記念碑はいかなる名文にもまさる雄弁を以て訴えていた。この碑の前に立ってこの男の顔を仰ぎ見るとき瞬時にしてこの隧道工事の労苦を理解し、痛しき犠牲者に対する同情と満腔の謝意を覚えぬ者はないだろう。

ロンドン滞在中、私は何回となくトラファルガー広場を訪れ、その中央に聳え立つ記念碑から受ける感動を心に嚙みしめた。然し仰ぎ見る冲天のネルソン提督の像よりも塔の基を取囲んでいる4面の青銅群像から遙かに深い感銘を受けたのである。それはトラファルガー海戦の4つのシーンを示していた。真正面にある第3の像はみごとに立体感をもつ浮彫りであったが、今まさに戦闘開始の火蓋を切らんとする瞬間、英国艦隊旗艦上甲板の息詰る緊迫の状況を描いていた。既に敵弾を受け甲板上に斃れている者、風を孕んだ帆陰から銃の照準を合わせている者、戦闘開始の信号を今やおそしと待ち構える全将卒の見守るなかに隻腕の提督ネルソンが悠容迫らず沈着な態度で将に命を下さんとしている。実にトラファルガー海戦の最も重大な劇的一瞬を捉えたものである。この浮彫りの下に記されている言葉は言わずとも知れよう。

England expects everyman will do his duty.
の大文字である。これを読んだとき胸の底から湧き上る感動を押さえることができなかった。この信号を伝え聞いた全将卒悉く祖国の期待に心からの感激を以て応えたことであろう。生命を捨てて己の使命を果たさんとする者こそ真の勇者であるまいか。名将のもとに弱卒なしとはまさにこの事である。英国はすべての者が進んでその義務を尽くすことを期待するという歴史に名高い感動的信号を掲げることは提督ネルソンにして初めて可能であったかも知れない。然しネルソンをして敢えてこの信号を掲げしめ得たのは英国国民の魂に宿る、己の生命に賭けても国を守らんとする気概と勇氣、力強い責任感が共に信頼するに足るものがあつたがゆえであろう。提督は将卒を信頼することができ、将卒はその信に応えることが出来た。それは真に羨しい国策しい時代と言わねばなるまい。

考えてみるとこの信号の言葉は戦場の軍人にのみ妥当する言葉ではなく、いかなる時、いかなる場合、いかなる人々にも訴えることのできる千鈞の重みを有する千古不磨の名言でなかろうか。責任と信頼—これは実に社会道徳の根本精神を言い尽くしている。国民の道義を支えるものとして他に何をつけ加える必要があろうか。多くの論者は西欧の没落を口にし大英帝国

の光栄ある時代は既に去ったとしてその挽歌を唱う。たしかに英国は第二次世界大戦の結果植民地の凡てを失い、財政の建直しは著しく立ち遅れ、物的損失は償い切れぬものがある。然しトラファルガー海戦において発揮された精神こそ英国の至宝であって、この精神が英国民の魂の中に生きている限り英国は磐石の礎の上に立ち続けるであろう。

ウォタロー広場の一隅にあるJ・フランクリンの記念碑を見るまで、私は不明にして斯かる人物を知らなかった。碑銘には極めて簡潔に北西航路の発見者と記されているだけである。然しその浮彫りは文字の足らざるを補いフランクリン探検隊の悲惨な運命を剩す所なく示していた。厚い氷山の絶壁に囲まれた雪原の上で防寒服姿の数十名の隊員が深い悲しみに沈んで立っている。彼らは今隊長を北海の孤島に葬らんとして永遠の別れを告げている所である。しかしこの群像が告げているのは永別の悲しみだけでなく、そこには異様な絶望感が漂っているのが感ぜられた。

フランクリンの活躍したのは今を去る130年の昔、間宮林蔵とほぼ同時代の人、日本では鎖国の夢が漸く破られんとする頃である。彼の発見した北西航路とは北氷洋に面するカナダの北岸に沿い北大西洋からアラスカを迂回して太平洋に通ずる航路のことである。世界の耳目を集めたアムンゼンやスコット等の極地探検のような華々しさはないが世界海運業に対する貢献は遙かに大きいと言われる。しかもナンセン、アムンゼン等の極地探検に先んずること実に70年であることを想えば海洋探検史上いかに画期的なものであるかが知れよう。彼はもと海軍士官であったが数次に及ぶ北大西洋海洋調査探検に参加し、その調査せる海岸線はハドソン湾から北米カナダ東海岸一帯、北氷洋にまで及ぶと記されている。その後彼は前人未踏のカナダ北氷洋航路調査のため2艘の艦艇に139名の士官、水兵を乗せて英国を出帆した。時に1845年5月19日のことである。7月の末カナダ東海岸ランカスタ海峡にさしかかる姿を見せた後フランクリン探検隊の艦影を見た者は居ない。無線通信の開発されぬ当時としては通信連絡の途は全くなかった。祖国にあって待ち侘びる家族の憂慮はいかばかりであったか。予定の二年を経過しても何の音沙汰もなかった。事態容易ならざるを察知した英国は朝野を挙げて次ぎ次ぎに捜索隊を送ったが彼らの消息は杳として不明のまま12年の歳月が空しく流れ去った。最後にフランクリン夫人によって遣わされた捜索隊が消息を齎したのは探検隊が出帆してより実に14年目、しかもそれは探検隊長以下139名全滅の悲報であった。探検隊が発見されたのは北極圏に近いキング・ウィリアムズ島であった。既に白骨と化していた多くの遺体の傍に残された日誌が1848年4月25日までの記録を報ずるだけで、その後の事は何も知られていない。その日誌によると探検隊は海洋調査を続けながら一時は北緯77°の地点まで達したが、コルンウォルズ島の西岸を南下中、流氷群に閉じこめられたまま二

度の越冬を強いられた。祖国からの通信連絡は全く絶たれ、脱出の望みもなく北海の孤島に閉ざされた隊員一同の苦悩はいかばかりであったか。2ヶ年の間に隊員相継いで倒れ、47年6月11日には柱とも頼む隊長も斃れた。あけて48年4月それまで生き残っていた隊員は遂に船を棄て、徒歩で茫漠の氷原を踏破して祖国に帰ることを決意した模様である。しかし彼らの体力は既に尽き果てていた。一人のエスキモー一人の目撃した所によると隊員は歩む程に次々と寒風吹きすさぶ雪原上に倒れ悉く息が絶えたという。世界の探検史上他に例を見ない悲惨な記録である。

欧州の各地を旅している時、到る所でこのような青銅群像に出遭った。彼らは時代と国籍の違いを越えてこれを見上げる者の魂に今なお語りかけてくる不思議な力を有っていることを知った。それは軍人であると社会事業家、探検家或いは市井の労働者であるとを問わない。それはそれぞれ今日の国家の礎を建てこれを守るため己を捨ててその責任を果たした祖父たちの霊が現在生きている者の魂に訴える歴史の声とも言うべきであろう。然し日本ではどうであろうか。商魂の露骨な打算が産んだ俗悪な青銅像を観光地で見かけることはあっても純真な少年の魂の形成に役立つような感銘深き青銅群像はどこにあるだろうか。日本の為政者も教育家もこの点につき殆ど配慮しないことを怪しむのである。

永い歴史をもつ国家や民族の歴史を緋くとき、それは決して繁栄と光栄の頁だけでなく、汚辱と敗惨の暗黒の頁もあることはむしろ当然であろう。また歴史評価の尺度も時代と共に変ることを先頃の苦い経験を通して我々は知った。さらに透徹した眼を以てすれば人間の歴史は光栄の頁の中に暗黒の色がのぞき、絶望の頁の裏に希望の光が輝いている。それが現実の歴史であろう。これは日本の歴史においても同じことが言えよう。一たび発展の道を踏み外したからと言って文字の世界から過去の歴史を抹殺しても過去の歴史そのものを抹殺することはできない。終戦後の日本は祖父たちの失態を責めるのに急な余り、彼らの功績に対する正しい評価を忘れていないだろうか。

今日我々が日本の中に生を享けているのは良きにつけ悪しきにつけ、すべて祖父たちの血と汗と涙によって贖われた尊い遺産のおかげである。彼らの作りあげた国土と富と伝統と文化の遺産の中で我々は生まれ、育ち、培われてきた。己の国史を解釈し伝統を批判することは自由であるが、それは歴史と伝統を否定し、抹殺することではないし、我々日本人は日本の歴史と伝統を離れては存することも出来まい。

日本の歴史上、偉大な功績と志操の高さにおいて永く後世に伝えたいと思う人物は雲の如く存するであろう。日本人にとって忘れることのできぬ大先輩との魂の出遭いができるよう優れた青銅群像を建立することは次代の日本を担う少年に対する、大人の責任でないだろうか。 (筆者・日本大学工学部助教授)

図書費の寄贈を受けて

廣川 友雄

昭和47年度より、工学部校友会から毎年30万円の図書費の寄贈を受け誠に有難く使わせて頂いておりましたが、此度校友会報にその使途などについて書いて呉れとのことでした。かねがねそのような機会があれば校友の諸君に謝意を表したいと存じておりましたので、ここに改めてお礼を申し上げます。

このような寄贈を頂いた時には寄贈者の意図に沿うよう努めるのが至当であり、伺いました処、教育研究に役立つもので、研究上高度なものならなお良いとのことでした。図書委員会に諮りましたところ、Landolt-Bornstein の数表といって、目下世界で最も信頼され、最も広範にわたって集録された物質常数表を備えたいとのこととなりました。これは総額で約150万円、各分冊2～8万円程度の大部なものですので、今後毎年購入し続けてその全体を校友会寄贈によるとすると、その寄贈も權威あるものとなり、後輩に残す趣旨も生きるものと全員賛意を表しました。何しろ大部のため目下継続購入中であります。

また、この考えには、逆に各科に数万円ずつ分けて随意に購入すると、間もなく10万冊になろうとする書庫の棚に校友会寄贈の捺印ある図書が、所々にあることになり、全く目立たなくなるであろうとの配慮もありました。

尚 父兄会からは昭和46年以降毎年150万円の図書費寄贈を頂いており、これについては在学生在が直接手にとって見る機会の多い本との意向が附されておりますので各科それぞれ選別してもらって購入しております。

郡山に向われる際は立寄って頂き度く存じます。

(筆者・日本大学工学部教授、工学部図書館)
館長兼務

雑 感

安 東 弘

先日帰郷(郡山)の際、太田校友会会長から校友会報に投稿を勧められ恐縮した次第。何分にも締切期日が迫っておりましたので、近頃感じたことを雑然と並べることで、御無礼乍ら御免を蒙らして戴きます。

1. 校友会総会(郡山)や、俊英寮会(北心会)や、久高沖繩県道路課長歓迎会(渋谷)等の会合で旧友に逢う。卒業して19年になる。学生生活の色々なこ

とが、昨日のように思い出される。「やあー、久しぶり」と差し出す名刺、「偉くなったなあ」「立派になったなあ」「オッス」-----等あちこちで挨拶が交わされる。

旧友には学生時代の面影が残っている。19年の歳月の隔たりを忘れた「学生気分」で歓談が始まる。どの会合も大体同じ経過を辿る。私はこの光景の中に他で見られない、温かい同窓生だけのものつ何ものかを見出すことができた。昔から「環境は人を作る」といわれているが、あのアカシヤ並木、阿武隈の清流にかこまれた自然環境と、土地の人情が家族的教育と吻合して立派な人間を形成し、卒業生を社会に送り出しているのも「故あるかな」と感ぜずにはいられない。この種会合が最近全国各地で開催されている由、母校発展の一助になれば喜ばしいことである。

2 兵法のはなし

最近建設業界で活躍している校友から、自衛隊の兵学書を勉強したいともちかけられ、話をしているうちに、「統師綱領」「作戦要務令」に及び、造詣の深いのに驚かされ、自衛官である自分が恥ずかしくもあった。確認したわけではないがアメリカでは、孫呉の兵法が日本よりもまじめに研究されている由その思想がかつては世界を震撼させた、わが武士道の生成に及ぼした影響も見のがせない。日本の経営者の一部では単に実戦上のことでなく、広く政治・経済、外交等又処世のためにも必要であるとして研究されているようだ。

さてその「統師綱領」の中心となり、原動力となるものは実に将師にして古来軍の勝敗は、その軍隊よりもむしろ将師に負うところが大きいといわれている。戦勝は将師が勝利を信ずるに始まり、敗戦は将師が敗戦を自認するによって生ずる。故に戦に最後の判決を与えるものは実に将師であると。「同じ戦況でも名将の目にはチャンスとうつり、凡将にはピンチに見える」これは個人についても同じことがいえるのではないかと思う。長い一生の間には時には困難に直面し、自分を減したくなるような場合もあるかも知れない。しかしその時には、いやそうじゃない、こんなに気が弱くてはいけない、やはり努力し、かつまた希望をもってやっていけば、立派に報いられるのだ。こう自分の心に云い聞かせてやれば自ずと道が開けるのではないか。

大学を卒業し自衛官の道を歩んだ私が今兵法を友に語る時、何かを自分にいい聞かせているようでない。

(筆者・土木工学科第3回卒業、
東京防衛施設局施設部施設連絡官)

君津市のP・Cローゼ 橋施工について

大浦 弘夫

1. ま え が き

君津市は、房総半島の南部で東京港に面する 311km²の広汎な地域でその中に京葉臨海工業地帯の南部拠点として新日本製鉄君津製鉄所を誘致して以来、大規模な臨海工業都市として変容し、工業立地による豊かな経済基盤に恵まれ、都市施設の充実のため、都市計画事業が急速かつ着実に施工されており、その一環として君津新橋が建造されたのである。都市計画画、土地の高度利用を図るため、アプローチの嵩上げは堤防高プラス 1.5mに決めて、自転車道・車道等への影響を避けた。架橋条件として桁高 1.3m以下、支間66mという寸法が決まった。永久構造物を支持出来る地盤は37m下の洪積砂利層である。このような立地条件で上部構造は、鋼構造（ランガーアーチ）とP・C構造（ローゼ）を比較した結果、経済性、美観及び維持費を勘案してP・Cローゼ構造を採用した。下部構造は鋼管杭と場所打杭（ベノト、リバー）を比較して、リバー杭に決定した。

2. 設 計

本橋の上部構造は、支間66mのコンクリートローゼ桁構造である。即ち、アーチ部材（RC構造）と下弦材（P・C構造）とからなり、下弦材は吊材（P・C鋼棒）によりアーチリブから吊下げられている。

2-1 アーチ部材の設計

アーチ部材は下弦材と剛結されており、しかも吊材によって上下弦材が連結されているのでこれらを一体構造として電質によって断面力を求めた。構造解析は平面構造として、死荷重はアーチ部材に格点荷重を載荷し、下弦材の死荷重は吊材を通じて作用する集中荷重として載荷し、活荷重は影響線に載荷して求めた。

2-2 下弦材の設計

下弦材は、ローゼ桁を構成する部材としての役割のほかに、活荷重を受ける部材でもある、即ち、橋軸方向にはローゼ部材として、アーチ部材から作用してくる軸方向引張力を受けもたせると共に、吊材が弾性支承の如く作用して、下弦材の荷重によって生ずる曲げモーメントも受けもたせる部材でもある。この軸力と曲モーメントに対してP・Cケーブル（SEEケーブルF200）を配置する。橋軸直角方向に対しては、格子桁として吊材の作用を無視して断面力を求めた。

2-3 設計条件

- | | |
|----------|---|
| 1. 橋 長 | L=68.1m |
| 2. 支 間 | ℓ=66.0m |
| 3. 幅 員 | B=1.5m+11.0m+1.5m |
| 4. 荷 重 | T L -20 |
| 5. 縦断勾配 | 0.5%放物線 |
| 6. 横断勾配 | 歩道 1.5%直線, 車道 2.0%放物線 |
| 7. 震 度 | 0.2 |
| 9. 破壊安全度 | 1.3D+2.5L 1.8(D+L)
1.3（地震時の最も不利な状態） |

3 施 工

3-1 下弦材支保工

下弦材の支保工は、ベコサポートとH鋼とによる支柱式支保工とした。支柱の基礎は15mのRC杭を打設し完成後は、河床から2m下で切断した。この基礎杭は最終的にはアーチ部材までの一切の重量が載荷されるので杭の施工は特に入念に行なった。

3-2 アーチリブ支保工

ベコサポートとベコガーダーとによる支柱式支保工とした。支柱位置は下弦材支柱位置と一致させて、下弦材に曲げモーメントが生じないようにした。

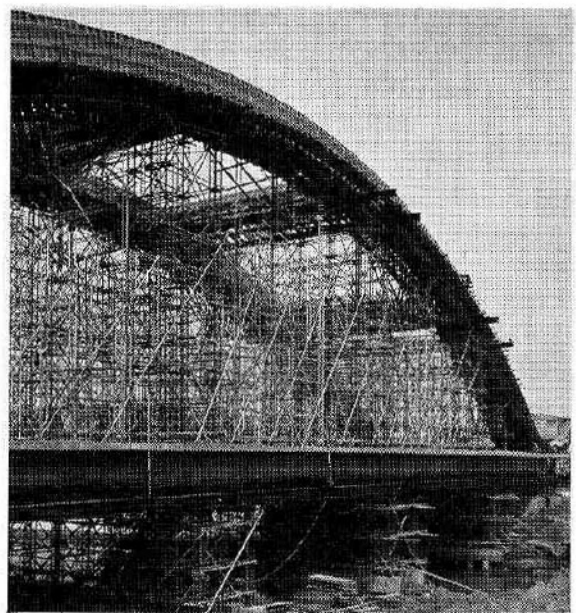
3-3 アーチ部材のコンクリート打設

コンクリート打設時の水平力及び水平偏移に抵抗させるため、あらかじめアーチスプリング部分に配置した。

3-4 支保工の解体

アーチリブ中央から解し、吊鋼棒に5tの引張力を与えて、施工時のばらつきをなくした。橋軸方向のプレストレスと吊鋼棒のため、予想以上に容易に解体出来た。

（筆者・土木工学科第5回卒業、千葉県君津市）
役所都市計画課勤務



大学と企業の間

寺田 聖一



今年三月、機械工学科を卒業しプラント会社に勤務している友人のY君から、技術者として、又社会人一年生として頑張っている旨の手紙が五月初旬に届きました。

拝啓、私の配属先もどうにか決まりました。

私は機械系入社員のひとりとして、研究所構造解析チームに配属されました。

このチームは主として、振動工学を用いて耐震、防震の研究が主で、レベルは相当高い様に感ぜられます。それに流体力学上に於ける問題等の研究題目があり、かなり幅の広いものがあります。

最近では原子力製鉄関係もある様子、又解析チームのメンバーは、大抵博士号を持つなど……、やはり学部だけでは間口が狭く、大学院修士課程程度の實力を身につけなければなどと感じているのが、入社三週間後の気持です。 敬具

私は彼からの手紙を読み、改めて企業会社内研究所に於ける研究と、大学に於ける研究を比べてみた訳です。現今までは、企業会社内研究所に於ける研究は、例外はあるにしても大抵は基礎研究よりは、むしろ即生産に結びつく技術開発が主眼である様に思う。かといって、大学に於ける研究が基礎研究を重んじているかという点、そうでもない様です。

ここに両者の共通点は研究費用であろうし、又 Engineering philosophy の欠如でもあらうと思う。

大学工学部に於て、産学共同という言葉をよく用いる。この背景には、即実学という意味と、共通点として述べた研究費用が作用していると感じられる。

即ち、大学に於て基礎研究するには、特に理工系に於ては多額の費用が必要である。

所が、産学共同と銘打って企業的な研究に趣をおくときほどの費用は不必要となり、企業との共同研究となると研究費用の援助も考えられる。

日本が高度の経済成長を遂げたのも英国などと違い、日本の大学に工学部があるのも理由にあげられている。実学に即していた訳である。しかし現実には、大学で果たすべきはずの基礎研究が企業内研究所で大学以上に重んぜられ、活発に研究活動が行なわれていることは、諸外国は別として、幾多の資料が物語っている。Engineering philosophy の欠如とともに、現今では取分け研究資金難に喘ぐ私立大学に於ての基礎研究は、衰退の一途を辿らざるをえないのではなからうか。

(筆者・昭和49年3月31日、日本大学工学部機械工学科卒業、同年4月1日、同大学院に進学、現在勉学中である。)

日大工学部に入学して

建築学科1年 塩沢 光江



さまざまな期待と不安をいだいて日大工学部に入学してから約2ヶ月がすぎました。この間にただ大学生活に早くなじもうと夢中ですが、来て来たような気がします。

ここへ入学して最初に感じたことは、とても広大な敷地

とアカシアの木々、タンポポなどが群生する、とてもすばらしい自然環境であることです。

ただ校舎が大きすぎて時々何とも言えない苦痛を感じることもあります。

授業のたびの移動がゲルマン人の大移動のごとく思えるのです。慣れてしまえば何とものないのですが、もう一つ印象に残ったことは、あのすさまじいクラブ勧誘のことです。以前から話には聞いていましたが、まさかあれほどとは思っていませんでした。

一度ことわっても、次から次へと付きまどってくるには、つくづくこまってしまいました。

興味もないクラブが延々と30分以上もクラブの意義や内容を話まくってくれましたが、わたしとしてはただ時間の浪費にしかすぎなかったと思うのです。

入りたくないクラブに無理に入部させるよりは、自分の好きなクラブを自分で選んで入る方が、より望ましいクラブが結成されるのではないかと勧誘期間中つくづく感じました。

また女子の数が少ないのがとても残念に思います。4年間の学生生活を続けられるか不安を感じました。もう少し、半数が女子学生であつたら堂々と歩くことができるような気がします。

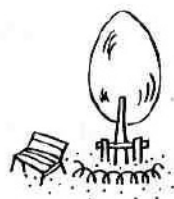
それに出来ることならもっと親しい人間関係をもてたらなど、思うのです。

例えば教授と学生や、クラスメート同志がもっと親密になればと思うのです。ただ講義を受けるだけでなくて……。

でも、これはマンモス日大においては、ぜいたくな望みかもしれません。

だいぶとりめない文章になってしまいましたが、今までに特に感じたことについて書きました。

(筆者・昭和49年度、建築学科新入生)



～～母校からの事務連絡～～

◎ 証明書について

卒業生の皆様益々御健勝にて御活躍のこととお喜び申し上げます。さて、各種証明書の発行依頼の御問合せがありますが、次の要領にてお願いいたします。

1. 申込方法 ○郵便にて教務課宛又は教務課窓口へ

○入学年度、所属学科を御明記下さい。

※電話での御申込みは一切受け付けておりません。

1. 手数料 ○成績証明書 100円

○卒業証明書 50円

※現金又は切手にて返送料金も添えてお送り下さい。

尚、昭和50年度から手数料が改訂になります。

～～事務局だより～～

－ ご 案 内 －

巣立ってから一度も母校を訪れたことのない校友の方々が、たくさんあることでしょう。正門から管理棟に向う両側の桜並木は、幸に公害の影響も受けず、年と共に太り、春になれば桜門そのものの光景を呈し、花は微笑をもって新入生を迎えてくれる。

なれど、アカシヤの木はめっきり少なくなった。野鳥のさえずる声も減ってきた。これは母校が充実発展の一途を辿るにつれて、キャンパスに各種の施設・設備をすることと、整地をしたり、環境を整えるために已むなく伐採するからであろう。

とにかく、往時の様相は激変した。校友の諸兄姉には機会をつくってお出掛けになられ、母校を訪れて下さい。過ぎし学生時代を追慕し、そして未来への躍進に活力の資を求められんことを――。

なお、母校を訪問の際は校友会事務局まで歩を伸ばしてほしい。事務所は去年4月現在地に移転しました。正門からは遠くなったが、管理棟(時計台のある)の南後方にあり、武道館の東に建った部室棟(第52号館)の中にあります。案内の略図は右記のとおりです。



来年度の総合名簿作成を控えてのお願い

校友会会則に「校友相互の向上親睦を図る」とありますが、これは本会の中心目的であります。そのためには、お互いの消息を把握して、緊密なる連絡をとることが先決であろうと思います。そうした観点から正確なる会員名簿を作成して、常時座右に備えておく必要があります。本会としてはその作成が大事業であります。

昭和50年度に第1回から第23回(昭和50年3月卒業)卒業まで、推定1万3千余名の全校友を網羅した総合名簿を作成する計画になっております。ついては、全校友の勤務先・連絡先を明確に集録し、皆様の期待に添うよう、より良い名簿の刊行を念願しております。校友の皆様にはこの趣旨を御理解になられ、下記の3点について御協力を懇願するものであります。

- (1) 勤務先・連絡先が異動した場合には、速かに正確なる資料をお寄せ下さい。
- (2) 全然連絡のつかない校友が相当数おりますが、会報も送れないで残念に思います。特に来年度予定の総合名簿作成を控えて、こうした校友を調査し、1人でも多く掲載したいと考えています。皆様方には同期生相互の連絡及び先輩後輩間の交際その他にて、校友として接触する機会が多いことと推察します。その場合に何等かの手掛りなど発見しましたならば、御手数でもお知らせ下さるようお願いいたします。

- (3) 総合名簿はかなりの厚さになり、諸物価高騰の折柄でもあります関係上、印刷製本代が、膨大な額になるものと予想されます。本会経済にピンチを招くやも計り知れないと憂慮している実情であります。

そこで、本会としては会費未納者の方々に、衷心から納入方を訴えるものです。この際、会費の完納運動を提起いたしますので、本会の実情を御賢察の上、大乗的見地に立って、全面的御協力を仰ぎたく重ねてお願いする次第であります。

就職戦線に視点を

校友各位には益々御盛栄の段、御慶び申し上げます。我が国の経済状況については、ここに述べるまでもなく、未曾有の試練が待っています。私共はじめ、本学を巣立つ後輩諸君も就職等については、大変心労しているのが現状です。

どうか、先輩諸兄におかれましては、適所に、我が工学部の卒業生を迎えていただきたく、御配慮御案内下さるようお願い申し上げます。

尚日本大学工学部の求人窓口は、下記の通りですが、本会事務局にても連絡することが出来ますので御用命下さい。

－ 記 － 福島県郡山市田村町徳定字中河原一番地
日本大学工学部就職指導室
電話 0249 (44) 1300 内線 204

校友会報第25号

発行所 福島県郡山市田村町徳定字中河原1
日本大学工学部 校友会
電話 郡山(0249) 44-1327
振替口座番号 郡山1990
郵便番号 979-66

発行日 昭和49年7月10日
発行人 事務局長 佐藤 光正
編集人代表 事業部長 根本 年雄